

★かわいい女



パントマイムジュンズⅡ
愛すべき隣人たち
岡田 淳



『ルードゥイヒ』に見る ヴィスコンティの耽美

淀川 長治

△映画評論家▽

私はこの映画に『これはルキノ・ヴィスコンティの全作品に貫かれた（苦悩）（歡喜）（悦樂）（耽美）（敗北）（恥辱）（純愛）そのすべてをここに美の陶酔ともいえる華麗なる時代色をもって描ききった（ヴィスコンティ芸術）その秘密の鍵を知る彼の告白』と見た。一九四二年の「妾執」から「搖れる大地」「ベリッシマ」「夏の嵐」「白夜」「若者のすべて」「山猫」「異邦人」「地獄に墮ちた勇者ども」「ベニスに死す」「ルードゥイヒ」「家族の肖像」「イノセント」に至るまでの彼の作品に一貫してえぐりだされているのは實に（恥辱）であった。『夏の嵐』（一九五四）の伯爵夫人が年若き中尉への恋に狂い兵舎に彼を求める身も世もなき姿を兵隊たちの目前にさらしたとき、その哀れはあたかも焰のまわりを飛び狂う蛾の羽根のこげ焼ける悲しさにも見てとれた。『白夜』のマリオの失恋孤独。『山猫』のドン・サリーナ公爵の新しき時代への敗北孤独。彼が求めてやまぬそれらの孤独の苦しみと敗北は、しかし「ベニスに死す」と「家族の肖像」の二作をもってその秘密はまさぐられたのであつた。すべてにホモセクシャルがかくされて、「白夜」「夏の嵐」の男女の狂愛の果ての残酷なる孤独にしてもその裏には果すべくして果えぬホモセクシャルの苦悩が形を変えて描かれているにすぎぬとさえ見られるのであつた。

ところでこの秋に登場する一九七二年作、三時間四分の大作「ルードゥイヒ—神々の黄昏」はいうならばその

（恥辱の美学）。ヴィスコンティは、ここに初めてあからさまにそれを描ききったのであつた。しかもこの耽美。

ドイツが五つの王国（プロイセン、バイエルン、サクセン、ヴュルテンベルク、ハノオファー）に区分されたとき、最も強大なのがプロイセン、これに次ぐのがバイエルン。ルードゥイヒ二世はこのバイエルンの三代目の君主。十九才で王位につき四十才で自殺して果てた。ルードゥイヒ一世は王都ミュンヘンに芸術文化都市を築いたが姫ロラ・モンテス事件をも起こした。王宮のスキヤンダルである。第二代の王はマクシミリアン二世と呼ばれている。やはり文人、学者を育てたが、もつて生まれた病身で妃のマリイはプロイセンの名門から嫁いだ美人であった。そして、この夫妻の長男として生まれたのがルードゥイヒ二世。思えば祖父はロラ・モンテスの美に溺れ、父は病身で、母がプロイセンの名門の出ゆえに王宮内のすべての権力を握っていたかに思え、その両親の長男ルードゥイヒがいかに育ったかがうかがえるのである。しかしこのルードゥイヒも一人の女性を熱愛した。彼女はいとこのエリザベートだった。しかし彼女はすでにフランツ・ヨーゼフ帝の妃である。そしてルードゥイヒより年上だった。ルードゥイヒの彼女への愛は男女関係の愛ではなく、姉にしたがう弟の愛とも思える仲であった。このルードゥイヒにしたわれたエリザベートは非常に勝ち気で自由ほんぽうに暮らしたがルードゥイヒには自分の妹のソフィーをあてがつてルードゥイヒ

に婚約さえも承知させたが、ルード・ヴィヒはその結婚をのばし十六才のとき観劇した「ローエンゲリン」のオペラ作曲家演出家指揮者のリヒア・ルート・ワグナーに夢中となつた。

そして自らすんで彼のパトロンとなりワグナーをミュンヘンに定住させ彼のため劇場を作り巨財を彼につきこんだ。ワグナーはルード・ヴィヒより三十三才も年上である。彼に

とつてルード・ヴィヒはまるで子供にひとしい。ワグナーはほいままにルード・ヴィヒから巨財を出させ自分はかつて女優であった妻があるにもかかわらず王立オペラの指揮者ハンス・フォン・ビューローの妻コジマ（リストの娘）と恋愛関係に落ちコジマは女兒を出産した。ルード・ヴィヒの与えた華麗なる邸宅でのワグナーとコジマとの間の子供の出産はオペラ楽団の祝福の演奏をもつてめでたく祝われたのであった。

そのころ（一八六六）プロイセンとオーストリアの戦争が激化しバイエルン王国はオーストリアの盟友として参戦したのだがルード・ヴィヒはあくまでも戦争を嫌い反対し弟のオットーを戦場につかわし、疲れきった弟はこのため発狂してしまつた。このあたりからルード・ヴィヒの悲惨なる狂態が本人自身を地獄へと落してゆく。舞台の男優を王宮内に招き彼に宝石を手当たり次第に与え、彼の逃げ去つたあとは城内にこもり



ワグナーとコジマ



エリザベートとルード・ヴィヒ



城内に設けられた湖水で白鳥と遊ぶルート・ヴィヒ

夜半に湖水で全裸で泳ぐ従者を林のあいだから盗み見るや彼をわが寝室に引き入れた。さらに馬丁たちが集まつて酒を飲み歌に興じているその馬丁小屋にしおびの姿で訪れ気に入つた馬丁を連れ出すのであった。この発狂に近いルード・ヴィヒが精神医のグッデンと湖水で死体となつて発見されたのはそれからまもない一八八六年の六月十三日であった。

ルード・ヴィヒ（ヘルムード・バーガー）、エリザベート（ロミイ・シュナイダー）、ワグナー（トレヴァー・ハワード）、コジマ（シルヴァーナ・マンガーノ）、オットー（ジョン・モルダード・ブラウン）。

この大作のセット美術の美しさ、王宮生活の華麗、アルマンド・ナンヌツィの目を見はる美術。

ところで、ヴィイスコンティはこの「ルード・ヴィヒ」をもつて何を語らんとしたか。映画美術、宮庭の華麗……いやそれよりもさらに奥ふかく若き日のルード・ヴィヒの求めたファンザー・コムブレックス、そして当時は許されぬホモセクシャルへの苦悩と耽溺。

これはヴィイスコンティ自身の一族が中世紀よりのイタリア最大の貴族名門。その育ちからの彼の孤独。ヴィイスコンティは「ルード・ヴィヒ」にそれを告白したのであろうか。

女体自景

細川

董ただす

△文とえ／哲学者▽

男はなめくじ女を、別にいやがりはしないものだ。実際の動物の方のなめくじは嫌われるのだが……。

最近は殺虫剤が普及して、いわゆるなめくじが少なくなったのか、台所でもめったに見かけない。

たまに見かけると、まだこんな生物が此世に捷息していたのかと稀少価値からゾッとしてあわてて塩をぶっかけるということになるのだが……。

私のいうなめくじ女も、どうも、最近関西では、ほんとに見かけなくなつたように思う。

先日は、偶然そう思つて私の所へなめくじ女のたまごが尋ねて來た。私が毎日曜夜、やつてゐるラジオ番組のファンだというのである。

「今晚わ！ 細川ただです！……」

という語りから始まる「夜の美術散歩」という番組なのだが、その出だしの声の主の顔を一度見たいというのでやつて來たのだ。偶然、私の中三になる娘の友人だといふので娘に案内されて來た訳である。下唇の分厚い彼女を見て、私はドキッとした。

「まさしく、なめくじ女だ！」

私は、即座にそう思い、昔出会つた何人かのなめくじ女を想ひ出していたのである。上半身から下半身へと目で中三の彼女を追つて行けばまぎれもない彼女はなめくじ女の素質を全身に備えているのであつた。

姿勢はきわめて悪い。ぶらりと下つた腕。態度もフテブテしいのだ。背も丸い。何かすれていようだ。顔もふくれてほんとにふくれているようだ。

なめくじ女

<98>

下唇の分厚さが、よけいそんな雰囲気をかもし出してゐるかも知れない。しかし、しなやかにのびた下半身はセクシーでさえある。

昔、出会つたなめくじ女が、そつたつた。

何かドキッとするずうずうしさというか脅威というか恐怖というか、顔をよくみて、そういう上半身とうらはらにセクシーな下半身が、青春と呼べるような年頃だった私の若い心をさかなでしたのである。

想い出の一夜は私の青春にとって衝撃的な恐怖と興奮の一夜だった。血色のよくないなめくじ色のナメナメした肌色のなめくじ女は、大学時代に友人と旅行したときその旅先の旅館での一夜、一同三人が襲来を受けたのである。

その時は、どうしても理解出来ず、女の魔訶不思議と思ひ悩んだりしたものだつたが、今にして思えば、妻をなくした旅館の主人の後添えになつたばかりの中年のなめくじ女がたまたまとまつた紅顔の美少年達（同じ哲学科の三人）にあまりの可愛さにいたずら半分ちよつかいを出してしまつたと大よその理解はつくのである。

彼女は、初婚だといつたがその辺はよくわからぬ。とにかく、欲求不満だったことは確かだ。旅帳を持って來た時から

「主人は、お酒のんでゴロ寝ばっかりで年寄りは困つたものよ」

といかにも分厚い唇をもてあましてゐる風にひわいな笑みを浮べてしまつたものだ。

私達三人はその夜このなめくじ女のえじきになったといふ次第なのだ。

それが三人三様だった。

キスの襲撃をうけた者。

フェラチオされた者。

そして私のようにセックスされた者。

私は夢か現実か目がさめたとき、さだかでなかつたので手で自分のあそこをわざわざさわつて確かめて見たほどだ。すると、まぎれもなくビシャツ！とぬれていた。

しかし、夢精だったという証拠もない。

三人に共通点は何とも気持のいいビチャツと冷たい彼女の肌の感触を恵まれたことだった。
おまけに廊下に、翌朝なめくじが何匹かはつていたのだから不気味な不思議な体験だった訳だ。

それだけではない。

夏休みが終つて学校が始まり、秋が深まつて天氣のいい春のようにやわらかい日ざしの午後、図書館のかべにもたれて本を読んでいたら、若い未亡人の図書館員が近づいて来た。よく見れば、何と、彼女も下唇の分厚い“なめくじ女”ではないか！私がゲーテの“若きウェルテルの悩み”を読んでいたのを彼女はのぞき込んで「私、ゲーテと同じ誕生日なの」

とそばからつぶやいて見せた。

「そう？」

と、あまり気のない返事をしたら

「今度の日曜日、私の下宿へ遊びに来たら？」

と彼女はさそつた。私はいいにくいことをいう率直さにひかれて男になつた気持で

「行くよ」

と答えていた。

私は今でも“なめくじ女”は男殺しだと思つてゐる。
あなたはいかが思われますか？



味覚の秋のランチタイム



そば処・手打ちうどん

木曾路

市役所前KEビルBF ☎ 231-1295
11AM~8:30PM 日曜祭日休

オフィス街の静かなオアシス



モンブラン

市役所前KEビル1F ☎ 231-3605
8:00AM~8:00PM 日曜祭日休

設計監修(株)末元建築事務所 和田利雄



■珈琲と私

5



珈琲は
育て
子
伴
五
朗
(茶房)
ナ
イル
店主

楽まい育そつなにコにず御分の一
した愛てれくあーあか客のに杯自
い実情るはり、わヒリら様責、の家
もにが様、あ全せーま立に任自コ焙
のデ必要な自げててはすち出で分、煎
でり要も分て私作、。あす、のヒの
すケとのいのる客ナえま最好、良
。さでま好このいるで初みをさ
トレ、供すみと好ルコ、かと作は、
で、深。ではみのとみら自る、



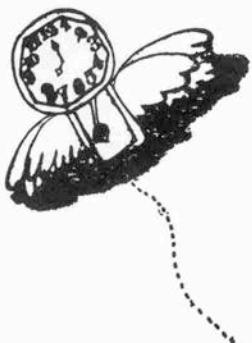
茶房 **ナイル**
神戸市生田区下山手通6-1-18
Phone (078) 341-7376

8:00AM~9:00PM 日曜祝日は正午まで

設計・壇設計事務所 伊藤 司

施工・まこと工務 菅 忠夫

神戸百店会
だより



★元町ジエム1階に

面白い潇洒な構えのビ

メインショッピングにふさわしく、リザ元町ジエム店の店内は、明るくハイセンスでコンテンポラリーな雰囲気のサロン。ジョリソール・

マネジメントの論文叢書

うなものにしたい」とマネジャーの今中英喜さん。元町の伝統ヒリザの先練され

たファンシヨンが融け合ない、神戸ファンシヨンの新しい核となりそうだ。

1月9日 国鉄芦屋駅附近
地下1階、地上6階のステーションビル、"モンテメール"がオープンする。太
丸芦屋店を中心となつて、各種専門店で構成されるが
百店会からも四店舗が出店する。

高さと、現代女性にふさわしいトレンド感覚のニットファッショングランドマツフンヌマー、ジナスピ

・マルケーザ・リザでは、
よりグレードの高いお洒落
を求める大人の女性を対象
に海外ブランド、ビルダジ
ュール、ボーシャルを取り
扱っている。「常に売り場
が新鮮で楽しく目を魅くよ



芦屋の街に、10月9日オープンするハイセンスなモンテメール

ようですね」と末積社長。回を重ねて一層充実した出品と新しいデザインに、会場はメモを片手にした業者の人達で賑わっていた。



展示会場にて末積社長

装苑は、サウンドベージュ系統のシックな内装、芦屋のハイセンスなお嬢さんやヤングミセス好みの、芦田淳、ミスバルマンのファッションを揃えている。瀟洒な気品の街、芦屋に似合つた、新しいショッピング

★UCCレギュラーコーヒー製品に貼つてあるUCC 100% P U R Eシールを送るを、抽選で毎週1名様にアダム＆イブのカプ＆ソーサが当たります。ハガキ郵便番号、住所、氏名、年齢、職業を記入の上、〒650-91神戸中央郵便局私書箱1200号UCCピュアティフルモーニングレザント係まで。12月21日まで実施中。★オリエンタルホテルのスカイレストランでは、10月1日より11月9日まで和風フランク料理のお食事券^ク秋和風スィーツ券を販売します。席席^シを用意いたしておりま^ス。メニューは和風オードブル、茶蒸し風スープ、エヒ^エニ^ニ老^シのグリルまたは特選神戸肉ステーキ、エリザベス風サラダ、丹波栗^{モロコシ}デザート、メロン、コーヒー。お1人様1万円(税・サ込、お土産付)

ポケット ジャーナル



★ 神戸文化賞・奨励賞決定
文化都市神戸の創造のため、毎年秋に神戸市が各界の個人・団体に贈っている
神戸市文化賞・奨励賞がこの程、次の各氏に贈られた。

△神戸市文化賞▽
鴨居玲洋画、西村元三朗(洋画)
新谷英夫彫刻、山沢栄子(写真)
柴田旭堂(邦楽)、劇団神戸演劇、
西村華道、田村亨(体育)
△神戸市文化奨励賞▽
神澤知丘(書、飛雲会)

贈呈式は9月13日に相楽園会館で開かれ、宮崎市長の手から各受賞者に賞状などが渡された。いずれも神戸の文化発展に貢献された。



欧風の洒落な外観を
見せるベガホール

★ 神戸文化賞・奨励賞決定
文化都市神戸の創造のため、毎年秋に神戸市が各界の個人・団体に贈っている
神戸市文化賞・奨励賞がこの程、次の各氏に贈られた。

△神戸市文化賞▽
鴨居玲洋画、西村元三朗(洋画)
新谷英夫彫刻、山沢栄子(写真)
柴田旭堂(邦楽)、劇団神戸演劇、
西村華道、田村亨(体育)
△神戸市文化奨励賞▽
神澤知丘(書、飛雲会)

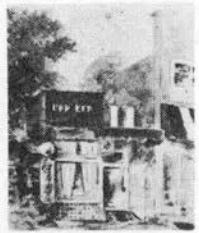
贈呈式は9月13日に相楽園会館で開かれ、宮崎市長の手から各受賞者に賞状などが渡された。いずれも神戸の文化発展に貢献された。

△神戸市文化賞▽
鴨居玲洋画、西村元三朗(洋画)
新谷英夫彫刻、山沢栄子(写真)
柴田旭堂(邦楽)、劇団神戸演劇、
西村華道、田村亨(体育)
△神戸市文化奨励賞▽
神澤知丘(書、飛雲会)

贈呈式は9月13日に相楽園会館で開かれ、宮崎市長の手から各受賞者に賞状などが渡された。いずれも神戸の文化発展に貢献された。



★ 椎名麟三文学碑が完成
晴れて除幕式が行われる
姫路出身の文学者、故椎名麟三氏の文学的業績を顕彰する文学碑(右)の除幕式が、8月24日午前11時から姫路市書写山ロープウェイ山頂駅北で行われた。



BARBER IN ASIYA

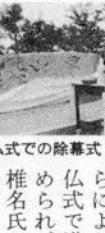
音響学の権威、神戸大学の前川純一教授が設計を指導しただけあって、32席と小規模ながらも音楽ホールの理想とされる。残響2秒の水準を満たしており、関西初の本格的コンサートホールとして今後の運営に大きな期待が寄せられる。

★ 椎名麟三文学碑が完成
晴れて除幕式が行われる
姫路出身の文学者、故椎名麟三氏の文学的業績を顕彰する文学碑(右)の除幕式が、8月24日午前11時から姫路市書写山ロープウェイ山頂駅北で行われた。

音響学の権威、神戸大学の前川純一教授が設計を指導しただけあって、32席と小規模ながらも音楽ホールの理想とされる。残響2秒の水準を満たしており、関西初の本格的コンサートホールとして今後の運営に大きな期待が寄せられる。

★ 椎名麟三文学碑が完成
晴れて除幕式が行われる
姫路出身の文学者、故椎名麟三氏の文学的業績を顕彰する文学碑(右)の除幕式が、8月24日午前11時から姫路市書写山ロープウェイ山頂駅北で行われた。

男の一裕さんによって除幕された。午後からは場所を円教寺会館に移して祝宴が開かれ、吉田姫路市長、大坪寿美未亡人の大坪寿美未さん、長



式での除幕式

式は円

教寺住職

らにより

仏式で進

められ

椎名氏の

未亡人の

大坪寿美未さん、長

男の一裕さんによって除

幕された。午後からは場所

を円教寺会館に移して祝宴

が開かれ、吉田姫路市長、

大坪寿美未さん、長

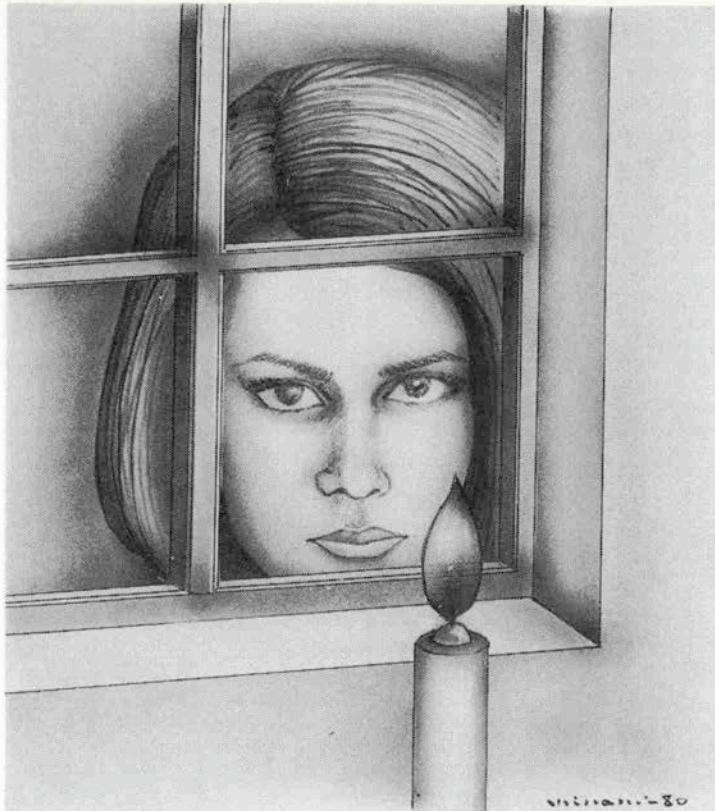
男の一裕さんによ

って除幕された。午後からは場所

暗葉樹

刀禰 喜美子

繪／南 和好



和子の促すまま伸子は廊下を渡って行った。院長夫人と知つて、擦れ違う人達は丁重に頭を下していく。開放病棟ではそれと聞かなければ常人と変わらない患者が、バレーボールやバドミントンに興じていた。

作業病棟は複雑作業場と単純作業場とに分かれていた木谷は単純作業場にいるという。社会復帰が可能でないということだろう。伸子はガラス越しに部屋を覗いた。

これが、一糸乱れぬ機敏なる行動、の好きだった木谷か、と見紛う姿で木谷がいた。

動作は緩慢で着衣は乱れている。ボタンは掛け違つてたし、ズボンは今にもずり落ちそうに床のゴミを掃いていた。作業している手は震え、時々仕事を放棄して室内を動き廻っている。大きなテーブルを囲んで二人ずつ組になり、真中に積まれたパジャマを上下組み合わせて置いた。MはM、SはSとビニールの袋に詰めるだけの仕事であるが、木谷は手が震えているため袋に詰める作業もできずに、畳む方にまわっている。絶えず何かを呟いていた。同室の者は慣れているのか、それとも患者特有の自分のことにしか関心がないせいか、一向にうるさがつてない風もない。独り言をいつているのは他にもいた。

上背があり幅もよく、肩章にふさわしいだけの矜持を示していたかつての木谷を、今の姿からは発見できない。背を丸め、白い髪をふり乱し、どこをみつめているか焦点のさだまらない力失せた眼光で、ひょこひょこうろつき廻っている木谷を見て、伸子は十五年余り生きづけた自分の存在が急に漂白されて、色も型も匂いもなくなつたかのような虚しさに捕われた。

看護士に連れられて、木谷は伸子と和子の前に来たが、無論、何の感情の変化も認められなかつた。うつろな表情でぶつぶつ喋るだけであつた。

「ワシは追放に合つてな。巣鴨にはいつておつた。有名な大将や将校がいっぱいおつた。ジャガガイモの蒸したのがたつた二つ。五つはある筈なんだが、看守がパクルのよ。パクルということはいつの時代にもあるんじや。腹

が減つて逃亡した。アル中でもこここの病院はええ。腹一杯たべさせてもらえるからな。ワシは戦争中は威張つたもんだ。少しもひもじい思いはせぢじや。缶詰でも砂糖でも酒でも何でも揃つとつた。女どもはそれが欲しさにワシのいうことをきいたものだ」

巣鴨にはいつていたとは妄想であろう。女どもはそれが欲しさに——の言葉は伸子を傷つけた。

「巣鴨を出たら世の中、逆さまになつてた。誰もワシのとこへはよりつかん。女房は男とどつかへ逃げよつた。女が強うなつてた。ワシは女とヤルとき、いためつけてからヤルのが好みやつた。殴る、蹴る、叩く、女の悲鳴を聞くと、チンポコがビューンとなつた。軍隊はな、星一つでえらい待遇のちがうとこや。上官には一切いいわけはできん。自分の意見はいえん。服従あるのみ。そのモヤモヤをワシは下の階級の者に向けていた。男でも女でもいじめるのがワシの趣味だ。弱者は犠牲だ。女を弱者と思つとつた。男の命令に従うもんじやと決めていた。苦痛を与えても平気だつた。それなのにいつの間にか、女の方が強うなつてしまつた。ワシは女にいじめられて、このサマじや」

木谷は入院当初は断酒会にも加入して積極的に直そうという意欲もあつたが、入退院を繰り返すごとに、暴力、虚言、盜み、喧嘩、幻聴、幻覚などの中毒症状が強くなつて、と看護士が説明した。

伸子の顔を見れば、木谷が何かを思い出しあはしないかとの期待は見事にはずれて、木谷の脳裏には伸子の欠片すら残つていないようだ。壁や窓や窓から見える中庭の風景と同じ程度にしか伸子や和子が映つていいようだ。ひとことでも嘲笑や皮肉の毒矢を報いたいと願つてきた伸子は、完全に無視されていた。どす黒い屈辱が身うちに走つた。木谷のえらの張つた首筋をみつめていると、急に鮮やかにあの時の記憶が甦つてきた。百外ろうその熱くて太い蠍を回んだ部分に流し込まれたような、ひりひりとした痛みが甦つてきた。もう忘れ果てた

と思つていた感触を、粘膜は覚えていた。このひりついた感覺は時々夢に現われた。夢の中では伸子は木谷の突起より巨大なるうそくで木谷のそれを根元から焼き切つて捨てていた。伸子は木谷に飛びかかって首を絞めたい衝動に駆られた。看護士や和子の眼がなかつたら、多分行爲に移してたどりう。

木谷をいじめたい欲求で、手が動きだした。思わず、木谷のしなびた腕をつねっていた。木谷の弾力を失つた皮膚は、いつまでもつねつたままの小さな山型を崩さずもとに戻らない。木谷は誰が何のためにそうしたのか分からず、にやにや笑つていた。

「今日はハムシ奴、よく襲つてきよる。もう三十匹も殺してやつた」

と、伸子のつねつた部分の下を引き続いて次々と自分でねりだした。

変わり果てた支配者に、伸子は何を訴え、何の怨みを述べ、どんな報復を与えることができるだらうか。何がどうなつて木谷をここまで追いつめていたのか知るすべもないが、強者は弱者となつて、伸子の眼の前で無残にもこわれた姿を見せていた。伸子は怨みが消えたわけではなかつたが、人間は一樣に弱いことを見せつけられ、出口を失つた涙が脳のあちこちに沈澱していくようであった。柴野も木谷も共に碎け、分解し、飛散してしまつた。

式は順調に進み、学生代表の挨拶が終つて花束贈呈がはじまるうとしていた。花束を贈る一年代表は女子で、受取る側の二年代表は男子であつた。

「ぼく、花束贈呈の代表に選ばれました。先生、見てて下さい」

瀬川が半ば照れながら嬉しそうにいつたのは一週間前であつた。伸子の部屋であつた。二人は裸でベッドにいた。よい成績を取りたい、代表に選ばれたい、そういう優等生としての一面と、伸子が毒を注ぎ込むといくら

でも吸収していく反面とを、瀬川は持ち合わせていた。会場にはいつた時から瀬川の坐つてゐる席をそれとなく探し、瀬川はそれを待つてたようにも懐しむような視線を返してきた。

昨年の四月、これまで学院で国語を担当していた和子が、姑の身体の工合が悪いから、伸子に代つてくれないかと依頼してきた。教壇に立つたことなど一度もないから駄目だと断つたが、あなたは何でも熱心に打ち込んでやれるタイプだし読書家だし絶対できる、と学校の方に連絡を取つてしまつた。

若い世代の和服離れと不況で、呉服の商売も規模を縮小していた状態だし、父の存命中は伸子の座は安泰だらうが、弟夫婦の勢力が強くなつていくことは確かな将来に、伸子は不安と脅えを持つていて。父に蠶販され庇われている伸子を、弟の嫁は嫉妬し、子供達の学資がこれからうんといふなどといつて、金銭的に伸子を牽制した。伸子は邪魔者扱いされるのも心外だし、自分にもこんな仕事ができるんですよ」ということも弟夫婦に示したかったので、講師を引き受けてしまつた。

最初の四、五回はあがりっぱなしであつたが、年齢からくる押し出しと体当たりの意氣込みでどうにか切り抜けられた。教えることは学ぶことなりといわれる通り、学生と共に学んでいこうと決めるが、気が楽になつた。学生といつても殆んどが二十代後半から四十代までの成人で、却つてやりやすい。各病院から五、六人のグループで通学なので、学校での失策はすぐ病院内に伝わつていく。準夜や深夜勤務あけの者はよく眠る。伸子は教壇から話しかけずには通路を巡回しておこして指名した。いつあられるかわからないといつて緊張感を与えた。病院ではえらそうにいっぱしの仕事をしている者が、授業中指名されて答えられないことは仲間に對して恥であるらしく、効果があつた。

瀬川は当れば正確に答えるが、自分からは進んで手をあげない目立たない学生で、テストをしてはじめて成

績の良いことが発見されるタイプであった。三十五、六歳であろうか。男にしては顔のこじんまりした、切れ長の目に才気の感じられる以外はこれといって特徴はない。

そんな消極的な瀬川が、作文に大胆な内容を書いたので伸子は愕いた。

——その先生を見た時、ぼくは初恋の女性にあまりにもよく似ていたので、あつ、と叫びにならない声を、ぼくは口の中でもごもごといった。

の書き出しではじまる発想は常識的であつたが、手紙でなく作文に書くということは意表をついていた。もし伸子が怪しからんと教務主任に公表すれば、瀬川は叱責を受け勤務先を辞めさせられるかも知れず、伸子が多分誰にも見せないと決めて書いたのなら横着で甘えがあると

いうことだ。
——深夜勤務あけで、先生の声はいつしか子守唄となつた。ぼくは忍者部隊の隊長で、その日仲間入りしたくのいちにすっかりのぼせあがつた。くのいちは何か目的があるのか媚態でぼくを誘つた。隊長の地位も惜しいが、くのいちの魅力にぼくは勝てなかつた。仲間同志の恋はご法度だ。ぼくはとうとうくのいちの誘惑に負けて、忍者部隊を捨て二人で逃亡した。逃亡生活は思いのほか辛い。転々と仕事を変えた。……

ただの虚構と無視すればよいと伸子は思いながら、紙背に潜む瀬川の意図なり目的なり本心が知りたい好奇心もあって、教員室に呼び出した。室に誰もいないのをみさだめて、瀬川がはいつてきた。扉を細目にして開け、うなだれて伸子のそばへくると、いきなり、すみません、と謝った。

「謝るところをみると、悪いと認めているのね」

「書いたことは全部本心で悪いとは思っていませんが、作文として書いたのはいきすぎたと反省しました。先生が、作文では自分を飾らずに本音を書くこと

といわれましたので、正直にそのまま受取ったので

「本音といったつて、私とあなたは先生と生徒です。

節度つてものがあるでしょ。私をモデルにして、しかも私からしかけて色々と誘惑をするように書いてあるじやないの。気に入らないわ」

「そのことは夢の中のできごとで、本当にそんな夢を見たんです。ぼくは気が弱く、女人には自分から働きかけられないので、そんな夢をみたのでしょうか。誘つて貰つたらどこまでもついていくのになあ、つていつも考へてるものですから、あ書いたのです」

「夢の中だけじゃないわよ。先生は夢の中のくのいちのよう、ぼくの肩に手を廻してひきよせ……なんて箇所もありますよ。もっと読みましょうか」

「先生、かんにんして下さい」

瀬川は赤くなつてうつむいた。伸子はもっと搊んでいじめたかつた。サディスティックな性格の人は教師にむいているどこかで、読んだ言葉が頭を掠めた。捕獲網に入つた昆虫にも似て、偶然むこうから網にひつかかつた伸子の目的に最もマッチした男であつた。

次に瀬川と個人的に会つたのは伸子の住居の近くの喫茶店であった。いつ住所と電話を調べたのか、瀬川が電話してきた。

「学校の帰りなのですが、先生のおすまいの近くにきているのです。会つて下さいませんか」

「用件は何ですか」

「よく考えましたら、先生をモデルにして作文を書くなんて、大変失礼だったと反省したのです。そのお詫びがしたくて」

「電話でそれだけきけば、もう会う必要はありません」「いえ、言葉だけではなくお詫びのしるしに夕食でもと思いまして」

「そんな気遣いはよろしい」「でもせひ、お会いして。いいえ、会いたいのです。来て下さい。兎に角会いたい」

電話の声は懇願になつてきつた。伸子はにたりとした。もう網から外に翔び出せない。羽をむしろうと足をひき

ちぎろうと、伸子の意のままである。木谷の代償者をやつと手を入れた、と内心凱歌をあげた。

喫茶店で瀬川は朴訥に話し出した。

「あれから随分考えました。先生に対する憧憬を、作文という場を借りて伝えるのが何で悪いのか、という聞き直りもありますが、やはり節度を越えた行為でした。百何人からいる生徒の中で、ぼくはいつも目立たない存在で満足していました。でも先生に対してだけは、何かで先生の関心をこちらに向けたいと思いました。ぼくは高校しかでいませんが詩だの小説が好きでしたから、少しほ得意の分野で気を引こうとしたのです」

話を煙草で繋ぎながら瀬川は語つた。伸子は沈黙してきいていたが、突然いった。

「あなた、私とタイムトンネルにはいらない。過去とか未来とか二人の背景とか周辺とかすべて消滅させ、あるのはたつた今このこの時だけがあるの。そして男と女がいる」

「そんな——」

「だつて、あなた、作文でそう書いていたじやないの。夢は過去も何もないふんわりした空間であつたつて。私がくのいちであなたはそれに誘惑される男なの。作文を地でいくのよ」

「あれは妄想で、とても現実では——」

「こわいの。じや、今日は何しに来たの。とにかく、私の部屋に来なさい」

伸子は命令した。ついて来るのか来ないのか。木谷が「来い」と命令してろうそくの焰を揺らしながら伸子を防空壕に連れて行つた時と同じようにして、暗い焰の焰印を瀬川に刻み付けてやらねば。

瀬川はショールダの紐を短くたぐつて手に提げながら伸子のあとに付いてきた。

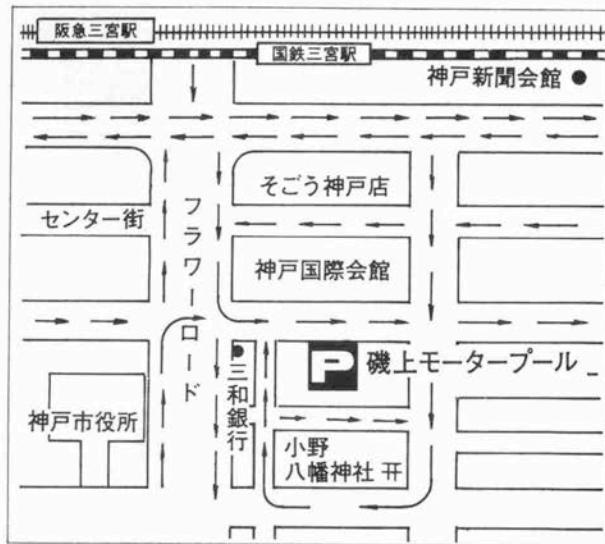
(つづく)



ビジネスに、ショッピングに

三宮で一番便利な

自走式立体モーターパールです



- 収容台数 300台
- 月極駐車可
- 年中無休
(8:00AM~11:00PM)

磯上モーターパール (神戸国際会館前) TEL (078) 251-7873

